

インタビュー  
コーナー

昨年冬の新型インフルエンザ流行の際には那覇市医師会の先生方には多大な診療応援をしていただきました。

本当にありがとうございました。



那覇市立病院医師会 会長  
喜屋武 幸男 先生

**Q1.** 那覇市立病院医師会長に就任され、約半年が経ちますが、これまでを振り返っての感想と、今後の抱負をお聞かせ下さい。

前任の川野幸志先生から引き継いで約半年になりました。幸い副会長を前回から引き続いて田端一彦先生が引き受けてくださり、その点では戸惑いも少なくすみました。

実は当医師会は単一病院での医師会であり、院内・院外活動ともに独自の活動としては活発とは言えない状況にあります。院内には医局会が別の組織として存在し、院内における問題は医局会で処理されますので、医師会として医局員に直接関わる機会は少ないわけです。当院の医師数は研修医を含めて約130人にのぼり、その約1/3の医師が毎年入れ替わるなかで、沖縄県医師会への登録者は約50%にすぎません。そこで私の当面の課題としては、医師会の存在意義についてもっと医局員の認識を深め、興味を持っていただけるようにすることだと考えております。

**Q2.** 貴会の基本的な活動内容、また、特に力を入れている取り組みがありましたら教えてください。

県医師会からの情報をスムーズに会員にお知らせし、何らかの対応が必要な場合には関係部

署と連絡を取り合いながら処理するようしております。単純な作業ではありますが、そのことを通じて当会会員に院内の問題だけではなく、那覇・浦添地区さらには沖縄全体の医療問題にも問題意識が持てるような環境作りにつながるものと考えます。

昨年冬の新型インフルエンザ流行の際には那覇市医師会の先生方には多大な診療応援をしていただきました。当時、時間的にも人員面でも切迫し、職員の精神的緊張も高まりつつある中での応援は、当院の医療スタッフに勇気を与えてくださいました。その時前任の川野先生は地域連携室室長も兼任されておられましたので、重要な調整役をされたと同っております。包括的な地域医療は決して単一病院で完遂することは出来ません。地域の多様な医療福祉施設や医院・病院などとの連携も重要になります。当医師会も、その際の窓口・パイプ役としての役割の一端を担っていただければと思います。

**Q3.** 那覇市立病院では、臨床研修指定病院として熱心に研修医の指導をされておりますが、指導方針、今後の計画等をお聞かせください。

また、地域がん診療拠点病院として、がん医療を積極的に行っておりますが、地域医療

**機関との連携、今後の課題等をお聞かせください。**

当院には現在短期研修も含めて28名の初期研修医と18名の後期研修医が研修中です。

初期研修または後期研修終了後、巣立った医師も約40名にのぼり、それぞれが、次のステップで元気に研修、活躍中だと聞いております。幸い当院の研修医は皆診療に前向きで、またチームワークがとてもしっかりといます。また当院の医局部屋はほぼ全科、それも1年目から各科の統括部長まで同じ空間（大部屋）に机を並べ、昼食や休憩なども同じ空間を共有しております。それが各診療科の垣根を無くし、医師どうしのつながりも深めているように思います。そこで気軽に患者さんの相談や診療上の質問のやりとりなどが行われています。これは研修医にとって恵まれた環境とも言えますが、一方で、研修医自ら患者の問題点を見つめ、解決していくという機会を少なくしてしまう側面もあります。また、定期的に症例検討会や勉強会も活発に行われてはいますが、他の研修病院と比較して決して多いとはいえません。もっといろんな形での議論の場を増やしていきたいと思っております。幸い、後期研修医を中心にその辺の議論がすすんでいるようですので、私たちとしてもできるだけサポートしていきたいと思っております。当院は、医師として最低限必要な知識・技術を身に付けるには最適な病院だと思います。また一人の医師として患者さんやそのご家族と向き合うための姿勢も指導しております。簡単に申しますと、自分自身の家族がその診療を受けて納得・満足できるような診療を行うように心がけると話しております。高度な医療知識や技術の習得は、年月が解決してくれますが、医師としての基本的な診療態度は初期研修の時に身に付けることが大切だと思います。そのような中に、早ければ来年にも当院の研修終了1期生がティーチングスタッフとして帰ってくる見込みですので、これからますます楽しみな病院です。

また、当院は平成17年に南部医療圏の地域

がん診療連携拠点病院としての指定を受けております。その役割として1.沖縄県がん診療連携協議会への参画 2.がん登録事業の推進 3.研修会などの開催 4.啓発活動や情報提供 5.地域ネットワークの確立などがあげられ、近日各種がんの地域連携クリティカルパスなどの導入が予定されています。現在は、がん相談支援センターを窓口とし、セカンドオピニオン外来、緩和ケア外来が設置され、外部からの患者さんにも対応しており、また地域のクリニックからのがん精査やがん治療の依頼は地域医療連携室を通じて常時受け付けております。一方当院で施行できない検査や治療に関しては、患者の希望に合わせて適切な医療機関への紹介を行い、その連携も比較的スムーズに行われておりまして、私共も大変助かっています。

問題点もたくさんあります。当院の救急室受診患者数は年間5万件を超えますし、当然救急入院患者も多数になります。時期によってはベッド確保に苦労しながら、かつ重症患者の診療にあわただしく追われながら、一方でがん患者さんの診療も行わなければならない訳です。本来がん診療は落ち着いた環境で、患者さんやご家族のお話にもじっくり耳を傾けながら診療をしてさし上げるべきだと思うのですが、なかなかそうもいかない場合が多いです。当院には緩和ケアチームが組織され、患者サロンなども精力的に活動し、がん患者さんのさまざまな苦悩に対応する体制はありますが、ホスピス・緩和ケア病棟がないため、患者さんを最後まで看取ってさしあげることができない場合も多々あります。患者さんからすると、命を預けたつもりでいた医者に最後まで診てもらえない不安と不満もあるのではないかと心を痛めることがよくあります。そのような状況で、近隣の3箇所のホスピス施設には大変お世話になっておりますし、一方で、那覇・浦添には在宅診療をしてくださる医療施設が充実しつつあり、その点でも本当に感謝しています。

**Q4. 本会または日本医師会へのご意見・ご要望がありましたらお聞かせ下さい。**

特に要望はありません。むしろ日頃の救急医療において小児科の先生方には多大な応援をいただいておりますし、また昨年新型インフルエンザ大流行の際には多くの内科の先生方にも応援をいただき本当に有難うございました。今後も感染症の大流行や、何らかの災害発生時などにおいては地域の先生方はじめ、医師会のご支援が必要なことがあろうかと予想されます。よろしくご理解いただけますようお願い申し上げます。また研修医の指導においても医師会の先生方のご協力は大変ありがたいものです。これからもよろしくお願ひします。

**Q5. 最後に日頃の健康法、ご趣味、座右の銘等がございましたらお聞かせ下さい。**

特別なことはしていませんが、年に1回の那覇マラソンの完走を目指して、日常生活においても出来るだけ歩くようにしております。エレベーターは極力使わず、階段を駆けあがることと、本番の1ヶ月前から体重コントロールをするようにしております。これがはたして健康にいいのかどうかは分かりませんが、幸い今のところ大病もせず健康です。

座右の銘も特にありませんが、心がけているのは、いつでも感謝！これに尽きます。

この度は、インタビューへご回答いただき、誠に有難うございました。

インタビューアー：広報委員 旭 朝弘

